

享保四年十月三日はじめて有徳院殿に
まみえたりまつり、寶曆十三年五月六
日家を繼、明和六年八月五日致仕し、
安永二年正月七日死す。年六十六。
法名紹點。妻は湯上彌太郎兼種が
女。

景季 徳四郎 兄景久が養子。

女子 平野久太郎徳亮が妻。

景季 徳四郎 實は景英が一男、兄景久が
嗣となり、後病によりて家をつがず。

景宣 喜久之助 四郎右衛門 實は平野
久太郎徳亮が一男、母は景英が女、
景久が養子となる。

明和六年八月五日家を繼、七年十二月
二十一日大番に列し、天明二年七月六
日番を辭す。寛政四年四月七日致仕し、
六年十月二十九日死す。年四十四。法
名紹江。

景則 重橋 幸次郎 寛次郎 四郎兵衛
實は小宮山利助昌則が三男、母は
鈴木忠左衛門定辰が養女、景宣が
養子となり、其女を妻とす。

寛政四年四月七日家を繼。時二百七十七歳
後九月二十五日はじめて將軍家に拜謁

卷第千四百十五

伴氏

山岡

景民

或景俊 右近 長門守 山岡美作守
景就が一男。
父とともに近江國勢多の城に住す。天正
十年六月明智光秀織田右府を弑せしと
光秀が家臣明智左馬助秀規近江國安土城
に入んとして蒲生氏郷がために敗走し、
勢多に退くところ一族等とおなじくこ
れとたかひ、勢多の橋桁を燒落して其
通路をたち、戦功をはけます。このとき
にあたりて東照宮和泉國堺より三河國に
歸らせ給ふのところ、所々一撥蜂起せる
により、一族等とともに勢多より信樂の
山中を擧導したてまつり、伊賀の境に至
るまで供奉す。

景定

半兵衛 母は某氏。
東照宮堺より御歸國のとき、父とも
に供奉し、後遠江國濱松をいりてめさ
れてつかへたてまつる。
景晴 右京

宗家美作守景隆が許に扶助せられ、子
孫藤堂和泉守につかふ。

景長 庄右衛門 母は某氏。
濱松城をいりて東照宮につかへたてまつり、
天正十九年五月三日相模國高座
郡のうちをいりて、采地二百石を宛行
はる、の旨御朱印を下され、後台徳院
殿に附屬せらる。文祿四年三月朔日死
す。法名淨珍。采地高座郡遠藏村の龍
前院に葬る。龍前院は景長が開基せる
ところなり。のち代々葬地とす。

景重 傳右衛門
出家して三井寺の光淨院に住す。後姪
景高死して嗣なきにより、おほせをう
けて其遺跡を相續す。

景正 勘左衛門 號久庵
兄が采地相模國遠藏村に住す。

景高 長三郎 母は某氏。
文祿四年はじめて台徳院殿にまみえたり
まつり、この年父が遺跡を繼、慶長
元年九月二日死す。法名源清。

景重 傳右衛門 實は景定が一男、母は
某氏。
はじめ僧となり三井寺の光淨院に住

す。慶長元年姪景高死して嗣なきによ
り、東照宮の仰をうけて其遺跡を相續
し、遷俗して傳右衛門景重と稱す。六
年大和國の内をいりて新恩二百石を賜
ひ、大番の組頭をつとむ。元和元年大
坂の役にしたがひたてまつり、八年六
月三日死す。年六十三。法名常心。
妻は織田家の臣垂井駿河守某が女、後
妻は諏訪部宗右衛門定吉が女。

景信

傳右衛門 母は駿河守某が女。
元和元年大坂御陣のとき父景重供奉に
列して彼地にあるにより、景信も大坂
に發向するところ、すでに城陥しか
ば、五月九日茶藤山をいりて東照宮に
拜謁す。寛永元年遺跡を繼、後大番に
列し、十年二月七日下總國香取郡のう
ちをいりて二百石を加恩あり。是時大
和國の采地を同郡のうちにつつされ、
すべて七百石を知行す。十六年六月二
十日中原御殿修理の奉行をつとめ、正
保元年八月二日赤坂水道修造の事をう
けたまはる。慶安三年閏十月四日先に
西城普請の事に預りしにより、黄金三
枚を賜ふ。承應二年十二月九日組頭に
進み、寛文元年四月六日死す。年六十
三。法名永堅。妻は山上氏が女。

景成

初景吉 彌右衛門 別に家を興し、

子孫又市郎某がとき嗣なくして家
たの。其世系下に見えたり。
女子 萬年彌三郎正頼が妻。
女子 土岐縫殿助頼泰が妻。
女子 太田九右衛門吉清に嫁し、離婚の
のち原田孫兵衛種春が妻となる。
景尙 山岡善之助景壽が祖。八兵衛 佐
次右衛門

女子

女子

女子

女子

景忠

傳五郎 母は山上氏が女。
正保三年六月二十五日はじめて大猷院
殿にまみえたりまつる。九歳に承應三年
三月二十三日大番に列し、寛文元年十
二月十日遺跡を繼、五百石を知行し、
二百石を弟七右衛門景元に分ちあた
ふ。九年閏十月十八日としておぼなく
つとめしにより、黄金三枚をたまふ。
延寶六年三月二十二日組頭にすすみ、
十二月二十七日二百俵を加賜せらる。
天和元年八月三日三崎の奉行となり、
十二月二十七日布衣を着する事をゆる
さる。元祿七年七月朔日御先銃炮の頭

に轉じ、十年七月二十六日鷹米をあらためられ、常陸國茨城郡のうちをい
て采地をたまふ。十一年正月十三日死
す。年六十一。法名玄正。妻は大井
新右衛門政直が女。
景繼 九十郎 九兵衛 母は景忠におな
じ。

萬治元年三月六日はじめて殿有院殿に
拜謁す。二年七月十一日御小性組の番
士に列し、寛文元年六月五日死す。法
名自香。嗣なくして家絶ゆ。
景元 山岡彦五郎信景が祖。七十郎 七
右衛門

景實 九右衛門
景輔 大吉 吉右衛門 吉左衛門 山岡
佐次右衛門景尙が養子。

某 傳之丞
某 十兵衛
某 吉兵衛

某 伴五兵衛政繼が妻。
女子

景顯 初景卿 新五郎 傳十郎 傳五郎
致仕號如雲 母は政直が女。
延寶四年二月二十八日はじめて殿有院
殿にまみえたまつる。八歳に元祿四年
十二月二日御小性組に列し、七年二月

二十二日桐間番にうつり、閏五月六日
御小性組に復す。九年十二月二十二日
としごろ意なくつとめしにより黄金二
枚をたまふ。十一年七月十八日遺跡を
繼、正徳二年八月二十八日下總國古河
城を本多中務大輔忠良にたまふによ
り、おほせをうけたまはりて木下清兵
衛信名とともに彼地におもむき、城引
渡の役をつとむ。三年四月十二日より
屋敷改をつとめ、享保二年十月十五日
御徒の頭となり、十二月二十一日布衣
を着する事をゆるさる。三年三月十五
日先に追鳥狩のとき、勢子の指揮御旨
にかなひしとて時服二領をたまふ。七
年二月十一日佐渡の奉行にうつり、十
一年二月九日職を辭し、寄合に列す。
元文元年七月二十五日致仕し、五年二
月二十八日死す。年七十二。法名湛然。
妻は峰屋傳左衛門定高が女。

景福 庄次郎
延寶七年六月六日はじめて殿有院殿に
拜謁す。八歳に元祿四年三月十三日死
す。年二十。

景郷 傳七郎
正徳二年二月二十一日はじめて文昭院殿
にまみえたまつり、享保四年七月二日

調す。七歳に 妻は景滿が女、後妻は堀越
殿直芳が女。
女子 景風が妻。
女子 實は保科越前守家臣大出勝右衛門廣
香が女、景滿に養はれて阿部龜次郎
正易が妻となる。
某 定五郎 雅丸 運敬 實は美濃郡龜
五郎茂正が三男、景滿が猶子となり
出家して三井寺光淨院の住職とな
る。

家紋 丸に横木瓜 二引兩
山岡 丸に横木瓜 二引兩

父に先だちて死す。年二十四。
女子 大井庄十郎政有が妻。
景任 小三郎 新五郎 實は山本八右衛
門邑旨が四男、母は間宮庄五郎信
政が女、景顯が養子となり、其女
を妻とす。
享保五年六月十一日はじめて有徳院殿
に拜謁し、元文元年七月二十五日家を
繼、小普請となり、寛保元年正月二十
七日御小性組の番士に列し、寶曆四年
七月十一日死す。年五十二。法名清光。
妻は景顯が女。
女子 景任が妻。

某 早世 金一郎
右門 傳十郎 傳五郎 致仕號一
睡 實は諏訪甚四郎頼寛が三男、
母は植村大膳政行が女、景任が養
子となり、其女を妻とす。
寶曆四年十月四日遺跡を繼、十一月二
十五日はじめて信院殿にまみえたまつり、
五年三月二十九日御小性組に
列し、後鷹狩にしたがひたてまつり、
鳥を射て時服をたまふ。明和五年十二
月二十五日番を辭し、七年十二月六日
致仕す。安永三年九月二十四日死す。
年五十四。法名一睡。妻は景任が女。

景明 條の城番となり、十年七月二十六日鷹米
をあらためられ、近江國蒲生郡のうちを
いて采地をたまひ、すべて六百石を知
行す。十二年四月十日務をゆるされ、寄
合に列す。十三年正月十一日御先弓の頭
となり、十二月二十一日布衣を着する事
をゆるさる。正徳三年正月二十二日務を
辭し、五月七日死す。年七十四。法名本
然。相模國高座郡遠蔵村の龍前院に葬る。
妻は勝清左衛門政重が女。

景邦 初景宗 七十郎 十郎右衛門 母
は政重が女。
延寶七年六月六日はじめて殿有院殿に
拜謁す。七歳に元祿四年十二月二日御小
性組に列し、十二年四月七日父に先だ
ちて死す。年二十七。法名禪無。麻布
の龍澤寺に葬る。妻は大久保平四郎
忠業が女。

女子 初景豐 萬之助 七兵衛 母は景
邦におなじ。
天和二年二月二十一日はじめて常憲院
殿にまみえたまつる。八歳に寶永六年
四月六日御書院の番士に列し、正徳三
年六月二十九日遺跡を繼、享保八年三

女子 景明が妻。

景滿

寅吉 要人 傳十郎 傳右衛門
實は竹中周防守定矩が四男、母は
橋本氏が女、景明が養子となりて
其女を妻とす。
明和七年十二月六日家を繼。八歳に三十三
八年三月二十五日はじめて淺明院殿に
まみえたまつり、二十七日御書院の
番士に列し、六月三日より進物の事を
役す。天明八年四月朔日仰をうけて松
平忠兵衛忠朋、中根半平正房と同じく
五畿内をよび紀伊、丹波、但馬、播磨、
丹後等の國々を巡檢す。八月二十五日
かの地に從ひし家臣等のしめし等閑に
して務に應ぜざる事あるにより、小普
請に貶されて出仕をとめられ、十一
月十七日ゆるさる。妻は景明が女、
後妻は仙石越前守家臣仙石伊織久定が
女。

女子 景滿が妻。

景風

初定萬 廣吉 傳十郎 實は安藤長
左衛門定賢が二男、母は堀田大藏大
輔家臣若林安兵衛高季が女、景滿が
養子となりて其女を妻とす。
天明五年九月朔日はじめて淺明院殿に拜

女子 初景豐 萬之助 七兵衛 母は景
邦におなじ。
天和二年二月二十一日はじめて常憲院
殿にまみえたまつる。八歳に寶永六年
四月六日御書院の番士に列し、正徳三
年六月二十九日遺跡を繼、享保八年三

女子 初景豐 萬之助 七兵衛 母は景
邦におなじ。
天和二年二月二十一日はじめて常憲院
殿にまみえたまつる。八歳に寶永六年
四月六日御書院の番士に列し、正徳三
年六月二十九日遺跡を繼、享保八年三

女子 初景豐 萬之助 七兵衛 母は景
邦におなじ。
天和二年二月二十一日はじめて常憲院
殿にまみえたまつる。八歳に寶永六年
四月六日御書院の番士に列し、正徳三
年六月二十九日遺跡を繼、享保八年三

女子 初景豐 萬之助 七兵衛 母は景
邦におなじ。
天和二年二月二十一日はじめて常憲院
殿にまみえたまつる。八歳に寶永六年
四月六日御書院の番士に列し、正徳三
年六月二十九日遺跡を繼、享保八年三

女子 初景豐 萬之助 七兵衛 母は景
邦におなじ。
天和二年二月二十一日はじめて常憲院
殿にまみえたまつる。八歳に寶永六年
四月六日御書院の番士に列し、正徳三
年六月二十九日遺跡を繼、享保八年三

女子 初景豐 萬之助 七兵衛 母は景
邦におなじ。
天和二年二月二十一日はじめて常憲院
殿にまみえたまつる。八歳に寶永六年
四月六日御書院の番士に列し、正徳三
年六月二十九日遺跡を繼、享保八年三

女子 初景豐 萬之助 七兵衛 母は景
邦におなじ。
天和二年二月二十一日はじめて常憲院
殿にまみえたまつる。八歳に寶永六年
四月六日御書院の番士に列し、正徳三
年六月二十九日遺跡を繼、享保八年三

月十二日年ころ意りなくつとめしにより黄金一枚をたまふ。十三年五月十日死す。年五十四。法名了開。葬地景邦におなじ。後代々葬地とす。妻は夏目藤右衛門信方が女。

景熙 初景弘 景利 八三郎 百助 源右衛門 播磨守 山岡吉左衛門景輔が養子。半四郎 杉田五左衛門忠福が妻。

某 又市郎 母は某氏。萬治三年六月朔日はじめて殿有院殿に拜謁す。寛文六年十二月十一日遺跡を繼、是月死す。年十五。法名玄松。嗣なくして家たの。

景房 百助 式部 七右衛門 致仕號夢休 實は森新右衛門義親が二男、母は鳥山平大夫精永が女、景經が養子となり、其女を妻とす。享保九年九月朔日はじめて有徳院殿に拜謁す。明和十三年八月十九日遺跡を繼、小普請となる。二十年正月二十六日大番に列し、元文三年三月二十六日西城御小性組の番士に轉じ、四年十二月二十七日番を辭す。寛保三年七月十八日致仕し、明和四年閏九月二十五日死す。年五十七。法名夢休。妻は景經が養女。實は山岡播磨守景熙が女、景經に養はれて景房が妻となる。

景爲 彌十郎 次郎右衛門 母は虎之助 某が女。慶安元年六月二十日はじめて大猷院殿に拜謁し、二年十二月二十六日大番に列し、のち慶米二百俵をたまふ。寛文元年十月十二日新番にうつり、二年十二月十二日五十俵をくはへられす。二百五十俵となる。三年四月殿有院殿日光山に詣たまふのとき感從し、六年八月三日死す。法名林秋。

景直 彌助 實は景成が二男、兄景爲が嗣となる。明曆三年二月十九日はじめて殿有院殿にまみえたまつり、萬治元年三月父に先だちて死す。

某 又市郎 母は某氏。萬治三年六月朔日はじめて殿有院殿に拜謁す。寛文六年十二月十一日遺跡を繼、是月死す。年十五。法名玄松。嗣なくして家たの。

景明 初景方 岩三郎 七兵衛 母は景經が養女。寛保三年七月十八日家を繼。明和六年七月七日死す。年四十二。法名常運。

女子 櫻井市右衛門信總が妻。種映 榮一郎 七右衛門 石原市之丞種正が養子。久兵衛 景宣が遺跡を相續す。

景中 初景住 七之助 半兵衛 母は某氏。明和六年十月六日遺跡を繼、十二月二十二日はじめて渡明院殿にまみえたまつり、安永五年四月十日大番に列し、九年七月十三日死す。年三十三。法名亮宣。妻は進藤三郎右衛門政休が女、後妻は尾張家の侍女山路氏が養女。

景中 初景敬 鏡次郎 久兵衛 實は景房が三男、母は某氏。安永九年七月十六日景宣が遺跡を相續す。天明三年十二月二十八日死す。年三十八。法名受參。母は山路氏の養女、離婚のとき、

家紋 丸に横木瓜 二引兩 山岡 八兵衛 佐次右衛門 山岡傳右衛門 景重が三男、母は諏訪部宗右衛門定吉が女。慶安三年九月三日召れて殿有院殿に附屬せられ、西城の小十人となり、この日はじめて大猷院殿にまみえたまつり、後月俵十口をたまひ、其後本城に候す。承應元年十二月十八日慶米百俵をたまひ、寛文三年四月日光山に詣たまふのとき、寛文三年四月日光山に詣たまふのとき、したがひたまつり、八年五月七日御納戸番に轉じ、延寶元年十二月十九日新恩百俵を加へられ、月俵は收めらる。貞享二年六月二十五日富士見番の頭となり、元祿十年四月二十三日死す。年八十。法名玄道。相模國高座郡遠藏村の龍前院に葬る。

女子 御手洗伊右衛門昌晴が妻。某 八十郎 延寶三年閏四月二十一日はじめて殿有院殿に拜謁す。天明八年五月七日父に先だちて死す。年十五。女子 相原市祐常貞が妻。

信景 彦五郎 實は森久馬義正が二男、母は某氏、景中が終に隨て養子となる。天明四年二月七日遺跡を繼。寛政五年七月五日大番に列す。

某 銀三郎 母は某氏。某 八十之丞 民之助 家紋 丸に横木瓜 二引兩

山岡 又市郎某がとき嗣なくして家たの。景成 初景吉 彌右衛門 山岡傳右衛門景重が二男、母は織田家の臣垂井藤河守某が女。寛永九年八月二十二日はじめて大猷院殿にまみえたまつり、後召れて小十人に列し、慶米百俵を賜ひ、十一年七月御上洛の供奉をつとむ。十九年十二月六日御納戸番に轉じ、明曆三年十二月二十五日月俵十口を加賜せらる。寛文五年十二月

女子 大吉 吉右衛門 吉左衛門 實は山岡傳右衛門景信が五男、母は山上氏の女、景尙が養子となる。貞享元年五月十日はじめて常憲院殿にまみえたまつり、元祿四年十二月二日大番に列し、五年正月二十八日慶米二百俵をたまふ。十四年十二月二十五日組頭に進み、十五年十二月二十二日二百俵を加賜せられす。二百俵の祿となる。正徳元年五月二十三日務を辭し、小普請となる。享保九年閏四月三日死す。年八十二。法名元心。麻布の龍澤寺に葬る。

女子 初景弘 景利 八三郎 百助 源右衛門 播磨守 從五位下 實は山岡七右衛門景元が三男、母は勝清左衛門政重が女、景輔が養子となり、其女を妻とす。元祿十一年八月二十八日はじめて常憲院殿に拜謁し、寶永六年四月六日御小性組の番士に列し、享保八年三月十二日としごろ意なくつとめしにより黄金一枚をたまふ。九年七月二日遺跡を繼、

十二年七月十二日小十人の頭に轉じ、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。十三年四月有徳院殿日光山に詣たまふの時供奉す。十九年十二月朔日仙洞附となる。二十年三月十一日從五位下播磨守に叙任す。元文二年五月十一日京都に在りて死す。年五十九。法名淨徹。彼地東山南禪寺の天授庵に葬る。妻は景輔が女。

女子

景熙が妻。

景起

早世 吉之丞

女子

山岡七兵衛景經が養女。

俊明

千次郎 源右衛門 佐次右衛門 致仕號明阿 母は景輔が女。

享保二十年正月二十八日はじめて有徳院殿にまみえたてまつる。時元文二年八月二日遺跡を繼、寛延二年五月九日西城御小性組の番士となり、寶曆三年四月十九日番を辭す。明和八年十二月七日致仕し、安永九年十一月十五日死す。年五十九。法名子亮。麻布の龍澤寺に葬る。のち代々葬地とす。

景連

猪之助

女子

女子

女子

景躰

元藏 母は某氏。明和八年十二月七日家を繼、安永元年十二月二十二日はじめて渡明院殿に拜謁し、二年七月九日死す。年二十一。法名良底。

某

三藏 貞丸 治部卿 遷源 三井寺光淨院の住職となる。

景良

榮次郎 實は櫻井市右衛門信總が二男、母は山岡七右衛門景房が女、景躰が終にのぞみて養子となる。安永二年十月七日遺跡を繼、三年九月朔日死す。年十八。法名早薫。

景安

金次郎 源右衛門 實は進藤三郎左衛門政休が二男、母は平山氏、景良が病篤に臨みて養子となる。安永三年十二月六日遺跡を繼、天明四年十二月二十二日はじめて渡明院殿にまみえたてまつり、八年九月十七日死す。年三十一。法名義縁。

景壽

善之助 母は西山氏。天明八年十二月二日遺跡を繼。時西百俵

家紋

丸に横木瓜 二引兩

卷第千四百十六

伴氏

篠山

今の呈譜に村上源氏にして、北畠雅家が後裔左少將親忠が二男右京大夫親紀、伊勢國五箇の篠山に住す。其男藏人親實、のち備後守にあらたむ。天正十二年長久手の役に織田信雄に屬し、そののち伊勢國鈴鹿に退居す。十三年めされて東照宮につかへたてまつり、姓名をあらためて篠山理兵衛景春と稱すといふ。これ寛永の系圖と大に異なるを以て、家にたづぬるに、古代大伴氏たるよし記して呈せしもの、恐らくは景春伏見に在りて討死ののち、大伴黨のものと共に近江國大原に潜居せしにより、彼等と混じて其祖をあらまりしものか、いまだ詳ならずといふ。今按ずるに山岡の系圖に慶長五年山岡道阿彌其弟景光にいふ。もし畿内の士兵を起す事あらば汝妻子郎從をよび舊好の一族等をひきて伏見城に籠るべしといひ、景光すでにその城に籠るるとき、十餘人の士及び歩卒百人をしたがふ。其士のうち篠山理兵衛景春あり。これによれば一族にして伴氏たるがごとし、よりに

景助

今なを舊きにしたがふ。

藏人

代々近江國甲賀郡烏居野村を領す。景助織田右府につかへ、某年死す。年五十。法名壽永。

資家

理兵衛 今の呈譜に、景春につくる。母は某氏。

父に繼て右府に仕へ、天正十年より東照宮につかへたてまつり、のち御上洛の時伊勢の國關の驛に在りて、資家を御前にめされ、近江伊勢兩國の山路地理の事を尋させられ、米千俵をたまふ。そののち伊勢國の代官職となり、關地藏の御殿を守衛す。慶長五年上杉景勝御征伐あるべしとて海道を下らせたまふのとき、長東正家隠謀のきこえあるにより、石部驛に在りて資家ひそかにこのことを言上にをよびしかば、六月十八日の夜關地藏に着御ありて包永の御刀を賞賜せらる。このときにあたり男彦十郎某と共に伏見城の守衛に加へらるといへども、寄手の敵兵多くして城に入ることあたはず。幸に城邊にして市人あつまり、盆踊せしかば、資家等これにまぎれてたやすく入ことを得たり。八月朔日彼城に在りて烏居彦右

某

篠山吉之丞資睦が祖。長吉 金石 衛門

資良

甚吉 理兵衛 母は一任が女。寛永二年大番に列し、四年麻米二百俵をたまひ、六年五十俵を加へられ、十年二月七日また二百石を加増あり。慶米をあらためられ、上總國のうちに在りて四百五十石をたまふ。十二年遺跡を繼、これまでの采地は收めらる。慶安元年大猷院殿日光山に詣たまふのとき供奉し、十月二十七日殿有院殿に附屬せられ、のち本城にうつらせたまふのとき、したがひたてまつる。明暦元年四月朔日死す。年四十八。法名淨心。牛込の鳳林寺に葬る。妻は興津角左衛門良次が女。

資友

篠山平大夫資壽が祖。瀬兵衛 平右衛門

資門

甚右衛門 母は良次が女。慶安二年三月三日はじめて殿有院殿に拜謁す。加明暦元年十二月五日遺跡を繼、小普請となる。三年六月二十日大番に列し、延寶四年五月七日組頭にす。み、天和二年四月二十二日二百俵の加恩あり。元祿六年六月二十六日務

を辭す。十年七月二十六日慶米を采地にあらためられ、下總國岡田郡のうちに在いて二百石をたまふ。のち岡田郡の采地を同國香取郡の内につつさる。十六年七月二十二日致仕し、寶永二年五月十五日死す。年六十五。法名宗肝。葬地寶良におなじ。妻は松平豊前守勝義が女。

重政

傳左衛門 傳三郎 長川清右衛門 永政が養子。

政興

安右衛門 安大夫 安右衛門 高室助右衛門政職が養子。

女子

酒依平左衛門昌忠が妻。

具晴

其太耶 母は勝義が女。

延寶四年六月五日はじめて嚴有院殿にまゐたてまつる。元祿四年十二月二日御小姓組の番士に列し、十六年七月廿二日家を繼。五百石を知行し、弟傳五郎資容に三百八十石の地をわかちあたふ。寶永二年正月七日妻の御かかりあるによりて寄合になされ、其番をゆるさる。元文五年八月二十一日死す。年七十一。法名惠觀。牛込の圓福寺に葬る。のち葬地とす。妻は甲府の家臣越智與右衛門清喜が女。

資容

篠山伊織實昌が祖。傳五郎

資秀 酒之丞 養貞 坂本養安資長が養子。

女子

本多作兵衛正が妻。

忠久

伊織 助九郎 實は小野次郎右衛門 忠一が三男、具晴が養子となりて其女を妻とす。

常憲院殿に拜謁し、七年四月十一日祖父小野次郎右衛門忠於が劍術を台覽あるのとき、忠久相手をつとめしにより、時服二領をたまふ。のち忠一嗣なきにより、其請旨をゆるされて父がもとに歸る。實は佐々喜三郎成澄が女、具晴に養はれて忠久が妻となり、忠久父が許に歸るのとき、したがひて彼家にゆく。

光官

吉之助 母は清喜が女。

元文五年十一月二日遺跡を繼、寄合に列し、十二月十一日はじめて有徳院殿に拜謁し、明和六年十一月二十四日御徒の頭となり、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。安永二年七月二十四日西城の御目付に轉じ、四年八月五日西城御先弓の頭にうつり、八年四月十六日より本城に勤仕す。天明元年五月二十六日西城に復し、六年閏十月二十日よりまた本城に候す。七年十月十日

二日新番の頭にすゝみ、寛政二年七月二十二日死す。年七十五。法名貫通。妻は鶴殿藤助長証が女、後妻は黒川左門盛章が女、また本多作左衛門成興が女を娶る。

具仲

八五郎 實は深津八大夫正尙が二男、光官が養子となる。

明和八年六月朔日はじめて淺明院殿に拜謁し、安永二年正月二十九日父にさきだちて死す。年二十八。

資房

三次郎 實は三宅源左衛門徳昌が二男、光官が養子となりて其女を妻とす。

安永三年三月二十二日はじめて淺明院殿にまゐたてまつり、のち故ありて家にかへる。妻は光官が女。

資朋

熊三郎 實は坂本養安資直が二男、母は某氏、光官が養子となる。

天明七年四月六日はじめて將軍家に拜謁し、寛政二年十月九日遺跡を繼。元文五年八月二十一日御書院の番士に列す。妻は京極鶴之丞高岳が女。

女子

實は大井七郎兵衛一装が女、光官に養はれて多田市右衛門正壽が妻

となる。

女子

家紋 花横木瓜に二引 菊 五七桐 三巴

篠山

資容

傳五郎 篠山甚右衛門資門が二男、母は松平豊前守勝義が女。

貞享二年三月朔日はじめて常憲院殿に拜謁す。元祿十六年七月廿二日父が采地、近江國甲賀下總國香取兩郡のうちをいて三百八十石を分ちたまひ、小普請となる。十二月四日大番に列し、享保九年十月九日新番に轉す。十一年正月十日死す。年四十八。法名禪無。牛込の鳳林寺に葬る。後葬地とす。妻は宮崎助大夫安仲が女。

資峯

初政武 庄吉 實は下島彦五郎政友が二男、母は神保新五左衛門長治が養女、資容が養子となりてその女を妻とす。

享保十一年四月五日遺跡を繼、十二年四月十一日新番に列し、十八年六月十日

四日死す。年廿五。法名全性。妻は資容が女、後妻は窪田彌兵衛直政が女。

女子

資峯が妻。

祐遠

金彌 傳五郎 實は下島彦五郎政友が六男、母は神保新五左衛門長治が養女、資峯が終りにのぞみて養子となる。

享保十八年九月二日遺跡を繼、延享三年六月十五日はじめて惇信院殿に拜謁す。寛延元年六月十四日西城の御腰物方となり、二年二月十一日西城の新番に轉じ、寶曆六年九月二十七日死す。年四十。法名了眼。妻は紀伊家の臣大崎左衛門長武が女。

資宣

鉄太郎 忠左衛門 母は長武が女。

寶曆六年閏十一月三日遺跡を繼、明和五年正月十九日大番となり、安永九年三月二十三日番を辭し、天明五年三月二十九日致仕す。時三十四

資行

安次郎

資昌

長太郎 伊織 母は梅田氏。

天明五年三月二十九日家を繼。時三十八 八年二月二十五日大番に列し、寛政二年七月十九日番を辭し、十年十月

十六日新番となる。妻は大河原忠左衛門勝人が女。

信國

吉次郎

正勝

高三郎

女子

大河原源太郎勝辰が妻。

女子

資高 好松

女子

資鍊 長太郎 母は勝人が女。

女子

家紋 花横木瓜に二引 五七の桐 三巴

篠山

資友

潮兵衛 平右衛門 篠山理兵衛資友が二男、母は三好因幡守一任が女。

慶安三年九月三日めされて嚴有院殿に附屬せられ、西城の小十人となり、この日はじめて大猷院殿に拜謁す。承應元年十二月十八日慶米百俵月俸十口をたまひ、延寶七年八月十一日番を辭し、小普請と

なる。元祿三年六月七日死す。法名天秀。小石川の祥雲寺に葬る。のち代々葬地とす。

春徽

七郎右衛門 彌七郎 平大夫 母は某氏。

延寶六年三月二十九日小十人となり、八年三月二十六日慶米百俵月俸十口をたまふ。元祿元年十二月二十三日御納戸番に轉じ、五年十二月二十三日慶米百俵を加恩あり、月俸は收めらる。享保五年正月十一日御具足奉行にうつり、十五年二月二十七日老をつけて務を辭す。このとき黄金二枚をたまふ。延享元年七月二十七日死す。年八十七。法名了性。

女子

佐々木庄左衛門正茂が養女。

系徽

平次郎 母は某氏。

寶永六年四月六日大番に列す。六歳に十元文三年十一月二十四日御納戸番にうつり、延享三年二月三日大坂の御金奉行に轉じ、寶曆二年七月廿二日故ありて務をゆるされ、小普請に貶さる。六年十月十五日死す。年六十三。法名通背。妻は夏目九郎右衛門次久が女。

政有

伊津右衛門 安右衛門 高室文五

女子 郎長政が養子。

女子 三橋藤十郎盛壽が妻。

女子

河野十郎左衛門通林が妻。

資春

豐之助 行跡よからざるにより、嚴命ありて嗣を廢せらる。

女子

進八郎 母は次久が女。

景純

寶曆六年十二月三日遺跡を繼。時年十安永六年七月十一日死す。年三十五。法名涼天。

資壽

小膳 平大夫 實は三橋藤十郎盛壽が四男、母は高室安右衛門政有が女、景純が終にのぞみて養子となる。

女子

高室安太郎政郎が妻。

某

早世 小膳 伊織 母は孝榮が女。

資勝

源兵衛 家紋 五七の桐 横木瓜

篠山

長吉 金右衛門 今の呈譜寶音につくる。篠山理兵衛實家が三男、母は某氏。東照宮につかへたてまつり、某年死す。法名道種。

某

八郎兵衛 今の呈譜寶正に作る。母は某氏。

東照宮につかへたてまつり、のち駿河大納言忠長卿に附屬せられ、彼卿罪かうぶりたまひ、領國を收めらるゝのち、處士となり、そののちめされて大猷院殿に奉仕し、甲斐國のうちにをいて采地二百石をたまひ、大番に列す。寛永十五年十月二十三日死す。法名道冬。牛込の圓福寺に葬る。後代々葬地とす。

資勝

金左衛門 大坂定番の與力に召加へられ、子孫御家人たり。

助正

竹之助 八郎兵衛 今の呈譜寶能につくる。母は某氏。

父が遺跡を繼、台徳院殿大猷院殿につかへたてまつり、大番をつとむ。寛文三年番を辭し、小普請となる。天和二年十二月十八日致仕し、三年八月二十七日死す。法名常進。妻は藥科孫九郎爲虎が女。

資道

五郎三郎 神田の館につかへ、子孫いま御家人たり。

資長

孫三郎 母は爲虎が女。

天和二年十二月十八日家を繼、三年閏五月二十一日大番に列し、貞享元年六月十二日御納戸番に轉す。元祿五年十一月九日新番にうつり、六年十二月十八日五十俵の加恩あり。寶永二年采地を常陸國新治郡のうちにうつさる。享保四年八月二十六日死す。年六十。法名觀空。妻は松波加平次直次が女。

和

友之助 渡邊藤三郎升が養子。佐橋儀兵衛佳重が妻。

資信

八三郎 母は直次が女。寶永六年四月六日大番に列し、享保四

資陸

十一月二十九日致仕す。時年七熊五郎 松崎六郎右衛門俊辰が養子。

資陸

吉之丞 兄資房が養子。

資睦

吉之丞 實は資信が四男、母は某氏、兄資房が嗣となる。

女子

寛政十年十一月二十九日家を繼。時年五十歳妻は秋山源太郎正易が女。

資久

喜七左衛門定前が妻。長十郎

家紋

花横木瓜に二引

卷第千四百十七

伴氏

伴

今の呈譜に大伴宿禰武持の後裔伴宿禰... 道に先祖五郎兵衛兼景伊豆守資盛二代萬松院義晴につかへ近江國に居住す。資盛が長男中務少輔盛隆今川義元に屬し、後東照宮の御麾下となり、永祿五年松井忠次が従士石原芳心が男、三郎左衛門某とばかりて三河國西郡の城主鶴殿長照が居城を圍ひ、終に長照等を擒にせしかば、其功を賞せられて西郡の内にして百二十貫の地をたまふ。七年六月酒井左衛門尉忠次をして今川氏真が將小原肥前守鎮實が籠れる三河國吉田の城を攻させらるゝのとき、忠次鎮實と和議をむすびしかば、盛隆其事をうけたまはりて、彼地にいたる。十一年小笠原新九郎安元とともに仰をうけて、遠江國馬伏塚の小笠原與八郎長忠をして御味方に屬せしむ。天正二年馬伏塚及び氣賀等のうちにして采地を加へられ、都て六千石を知行す。盛兼は資盛が二男にして盛隆が弟なりといふ。

盛兼

五郎兵衛 若狭守 織田右府に屬し、伊勢國龜山城に住す。天正十年六月右府事あるのち、東照宮伊賀路を渡御のとき盛兼病にかゝりしかば使者をまいらせ同族のもの志を合せて郷導したてまつる。十一年三河國に赴きはじめて拜謁し、のち六百貫の采地をたまふ。十二年長久手の役にしたがひたてまつり、四月九日戦死す。年三十八。法名全昌。妻は今川家の臣小倉内藏之助實雄が女。

重盛

五兵衛 母は實雄が女。 天正十年より東照宮につかへたてまつり、御傍に近侍し、廩米をたまふ。時長五年關原御陣にしたがひたてまつり、斥候をうけたまはりて筑前中納言秀林等が松尾山の陣營にいたる。元和八年八月二十五日死す。年五十四。法名道安。麻布の陽泉寺に葬る。これ重盛かつて開基せし所なり。後代々葬地とす。妻は越前家の臣坂井圖書某が女。

重正

伴吉之助盛厚が祖。作左衛門 伴平 寛永系圖に重正をもつて重盛が二男とし、盛政が弟の系にかく、今氏家をや

び吉之助盛厚が呈譜によるに、みな重正を兄とし盛政を弟とす。年齢等より考るに家説はなり。そのかみの撰譜盛政父が遺跡を繼しゆへ、長子の系にかけしものか、よりに家説に従ひ兄弟の順次をあらたむ。

盛政

小作 五兵衛 横右衛門 母は圖書某が女。 元和九年十月父が遺跡を繼、廩米百五十石をたまひ、是年はじめて大猷院殿に拜謁す。時に寛永八年二月大番に列し、十年二月七日二百石の加恩あり。是迄の廩米を采地にあらためられ、武藏國埼玉郡のうちに在りて三百五十石をたまふ。十六年十月二十三日より御銃砲藥込の役をつとむ。十八年四月十二日昨日西城にいらせたまひ、還御のとき、供奉の列に關るにより、御氣色蒙りて通塞し、九月五日ゆるさる。慶安三年八月二十七日又御成の時、供奉の期に後れしかば閉門せしめられ十月十九日ゆるさる。承應元年新番に還り、寛文七年六月十八日御寶篋奉行に轉す。延寶五年十月十九日務を辭し、小普請となる。天和元年十二月二十一日死す。年六十七。法名道性。妻は神谷八郎左衛門政成が女。

女子

石野傳八郎正數が妻。

重勝

伴與十郎正友が祖。三左衛門 平右衛門

女子

伏見勘七郎爲則が妻。

重長

初盛次 次郎助 權之助 五郎大夫 伴平 兄伴平重正が養子。

政繼

助之丞 新五右衛門 五兵衛 母は政成が女。

明曆三年七月十六日はじめて嚴有院殿にまみえたてまつる。五萬治二年七月四日大番に列し、寛文九年閏十月十八日年ごろ忘りなく勤めしにより黄金二枚をたまふ。天和二年七月十二日遺跡を繼、元祿三年三月二十五日組頭に轉じ、八年十二月二十五日二百俵を加へられ、十年七月二十二日廩米二百俵及び是迄の采地をあらためられ、上總國山邊武射兩郡のうちをいて、すべて五百五十石を知行す。正徳五年六月二十八日務を辭し、享保三年正月十二日死す。年七十六。法名道勇。妻は山岡傳右衛門景信が女。

女子

盛房 清右衛門

女子

伏見勘七郎爲智が妻。

政信

助之丞 五兵衛 母は某氏。 延享七年六月六日はじめて嚴有院殿に拜謁す。時に元祿四年十二月二日御小性組の番士に列し、九年十二月二十二日年比忘りなく勤めしを賞せられて黄金五枚をたまふ。享保三年四月七日遺跡を繼、十四年八月十九日番を辭す。十五年三月二十八日死す。年五十八。法名千悟。妻は中山權左衛門勝尋が女。後妻は毛利兵備元教が女。

女子

安藤又八郎正國が妻。

女子

柳澤源七郎時附が妻。

某

午之助 藤助

女子

中澤彦次郎景林が妻。

定政

主計 五兵衛 母は某氏。 享保十五年六月四日遺跡を繼、十月二十二日はじめて有徳院殿に拜謁し、十二月二十七日大番となり、元文三年六月二十五日御小性組の番士に轉す。寶曆十一年十月二十日死す。年五十五。法名休藏。妻は伊丹權大夫康利が女。

女子

中澤彦次郎景林が後妻。

女子

伏見數馬爲尚に嫁し、爲尚死するのち上田兵左衛門元知が妻となる。

女子

酒井八左衛門忠周が妻。

政聲

主計 母は康利が女。 寶曆十一年十二月二十九日遺跡を繼、十二年四月十八日はじめて澄明院殿に見えたてまつる。明和三年六月十七日死す。年二十五。法名全勤。妻は植平五郎正富が女。

女子

川勝清三郎廣豊が妻。

女子

川勝清三郎廣豊が妻。

政時

龜太郎 五兵衛 母は正富が女。 明和三年九月四日遺跡を繼。時に九萬石。天明七年六月十九日大番に列す。妻は加藤勘助正顯が女。後妻は朝比奈六左衛門泰有が女。また近藤半十郎政盛が養女を娶る。

政義

發五郎 母は某氏。

家紋

丸に林檎 菊 木瓜

伴

重正

作左衛門 作平 今の呈譜初重政後盛勝に作る。伴五兵衛重盛が長男、母は越前家の臣坂井圖書某が女。慶長十年めされて東照宮につかへたてまつり御傍に近侍す。三歳に十のち錦手赤坂梅花の御巻物を拜賜す。元和元年大坂御陣のときしたがひたてまつり、そののち御小性組をつとめ、慶米三百二十俵餘をたまふ。寛永三年台徳院殿洛に上らせたまふのとき供奉し、後御具足奉行に轉ず。十四年三月二十四日死す。年四十五。法名元頓。麻布の陽泉寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は遠山平右衛門正次が女。

重長

初盛次 次郎助 權之助 五郎大夫 作平 實は伴五兵衛重盛が四男、母は重正におなじ、重正が養子となる。寛永十五年十二月二十一日遺跡を繼、後大番に列し、明暦二年十一月十二日組頭にす、み、萬治二年十二月二十三日二百俵を加へらる。三年十二月十五日御船手に轉じ、二十八日布衣を着することゆるさる。寛文七年閏二月廿八日仰をうけたまはりて大坂に至るまでの海濱をよび安房、上總、下總等諸國

女子

十四日父が罪に坐して松平越中守定重にめしあづけられ、伊勢國桑名に赴く。

女子

盛幸

平助 母は孫三郎某におなじ。延寶二年十月十二日はじめて殿有院殿に拜謁す。時貞享元年十一月十四日父が事に坐して兄孫三郎某とおなじく松平越中守定重にめしあづけられ、桑名に至る。元禄三年四月十九日赦免あり。八月十五日めされて慶米二百俵をたまひ、小普請となる。十五年五月十日大番に列し、寶永七年十月朔日死す。年四十八。法名覺山。妻は佐藤氏か女。

盛尹

三次郎 母は佐藤氏が女。寶永六年八月二十八日はじめて文昭院殿にまみえたてまつる。時十七年十一月二十二日遺跡を繼、享保九年十月九日大番に列し、十五年七月二十三日番を辭し、寛保三年五月二十二日死す。年四十五。法名感新。妻は佐田養逸親政が女。盛富 三大夫 兄盛尹が養子。

女子

盛富

鑄之助 三大夫 實は盛幸が二男、母は佐藤氏の女、盛尹が嗣となる。寛保三年八月二日遺跡を繼、延享二年二月十二日大番となり、三年八月十二日番を辭し、寛延三年七月晦日致仕す。安永四年五月三日死す。年七十六。法名獨峰。女子 兄盛富が養女。

盛庸

織部 權左衛門 實は壺井傳右衛門長記が二男、母は盛幸が女、盛富が養子となりて其女を妻とす。寛延三年七月晦日家を繼、十二月十四日大番となり、寶曆四年四月十日御腰物方に轉じ、明和六年六月九日大坂の御鎮炮奉行にうつり、天明元年二月二十八日彼地に於て死す。年五十三。法名雪峰。大坂上寺町の西海寺に葬る。妻は盛富が養女。女子 實は盛尹が女、盛富に養はれて盛庸が妻となる。

女子

某

某

某

某

某

某

某

某

早世 八百太郎
早世 數馬

盛定

岩次郎 織部 權左衛門 母は盛富が養子。明和六年九月十五日はじめて淺明院殿に拜謁す。時天明元年五月六日遺跡を繼、寛政九年七月二十五日致仕す。妻は堀田内藏助正文が女。女子 三五郎 単人 壺井新五郎長住が養子。長紹 三五郎 単人 壺井新五郎長住が養子。盛厚 吉之助 兄盛定が養子。

盛厚

吉之助 實は盛庸が五男、母は盛富が養女、盛定が嗣となる。寛文九年七月二十五日家を繼。時三十五歳。家紋 林檎六魚鱗 菊 木瓜

重勝

伴

重勝

三左衛門 平右衛門 伴五兵衛重盛が三男、母は越前家の臣坂井圖書某が女。正保四年十二月二十五日めされて大猷院殿につかへたてまつり小十人に列し、後慶米百俵月俸十口をたまふ。慶安三年九月八日殿有院殿に附屬せられ、のち木城

正忠

幸之進 母は仁科氏が女。延享二年八月二十日遺跡を繼、寶曆元年三月十五日はじめて惇信院殿に拜謁し、五月十六日西城の小十人となり、後のを射て時服をたまふ。五年七月十八日番を辭し、安永八年七月四日死す。年五十一。法名崇悟。

正之

十次郎 實は佐野四郎右衛門政宣が二男、母は某氏、重次が養子となる。享保十五年十月五日遺跡を繼、延享二年六月十日死す。年五十三。法名禪瑞。妻は仁科氏が女。女子 天野千右衛門正久が妻。

重次

山三郎 太兵衛 實は石野五郎兵衛正積が二男、母は某氏、重勝が養子となる。延寶二年七月十二日遺跡を繼、小普請となる。元禄六年五月十九日小十人に列し、のち番を辭す。享保十五年七月二十一日死す。法名坦然。女子 天野千右衛門正久が妻。

重次

に候し、延寶二年五月二日死す。法名宗本。麻布の陽泉寺に葬る。のち代々葬地とす。

卷第千四百四十八

三枝部氏

三枝

正標 金之丞 母は某氏。
安永八年十月六日遺跡を繼、寛政元年四月十五日死す。年三十五。法名道仙。

女子

正友 與十郎 實は内藤三郎右衛門正方が二男、母は河合左門成賢が女、正標が終りに臨て養子となる。

寛政元年閏六月二日遺跡を繼。時年十八歳
四年九月二十五日はじめて將軍家にまみえたてまつり。九年閏七月二十九日小十人に列す。妻は中島八右衛門某が養女。

家紋 丸に林檎 五三桐

寛永譜に、家傳を引いてはく、仁明天皇の御宇異國の賊兵數萬筑紫に襲ひ來るに、より、宸標をなやましたまひ、群臣をめて議せらるゝのころ、かゝる事は神威をかり、人謀これに繼、よろしく神慮にまかせらるべきのよし奏しければ、やがて勅使を八幡宮にたてらる。時に示現ありしは、丹波國大安寺の良、維にあたりて枯たる榎あり。其木の三股の中に童子あらん。彼をして大將軍とし、追伐せしめよとなり。すなはちこれを尋ねしめらるゝのころ、果して十歳ばかりの童あり。勅使これに伴ひて京師にかへる。よりてちかくめし、子細を問せたまふといへども、あへて勅答せず。再び尋ねたまふにをよび、しばらくありて童子みづから其指を喰切、血をもて書して奏しけるは、我はこれ八幡大菩薩の命を受けて異賊を退治せんがため天降るところなりと。こゝに於ていよく信敬したまひ、時の大官におほせてこれを養はしむ。ひ

とゝなるに及びて其たけ七尺許、容貌凡ならず。はじめて三枝の氏をたまひ、守國と名づけらる。これ三股の中より出生し、かつ國家を守護するの器たるによりてなり。のち賊徒再び大軍を率ゐて筑紫に至るのとき、守國はせ向て速かに強敵を破り、九州たちまち靜謐す。其功を賞せられて播磨國にして領地をたまひ、また外患に備へんがため太宰大貳に任せられ、其後洛にのほり、禁裏に宿直する事年久し。故ありて甲斐國山梨郡能路に配流せらる。これ同國在職の始祖なり。子孫代々同郡に住す。守國家號を柏尾と稱し、また三枝に改む。同國にいて柏尾寺を造立し、長徳四年九月十九日死す。年百六十。男守將がとき守國が廟を建、三枝の神と崇む。其祭今に至りて年々たえず。甲斐國三枝の祭これなり。また同書に姓氏録を引て三枝部連は天津彦根命十四世の孫遠己呂命の後なり。顯宗天皇の御時諸氏をあつめて饗宴をたまふのとき庭に三葉の草あり。これを獻するによりて三枝部連とたまふ。この説ことなりといへども、書して參考に備ふといふ。今按に、家傳の説はなほだ奇怪に涉り、且寛永譜も家傳としてこれを加ふといへども、舊説たるにより、しばらくこれをしるす。

守國 太宰大貳

守將 野呂介

守忠 立河介

守繼 隱曾介

守黨 林部介

守久 野呂介

守經 野呂介

守明 野呂介

守義 野呂介

守重 野呂介

守氏 野呂介

寬有 勝圓坊 阿闍梨 柏尾寺の別當となる。

有勝 圓城坊

寬覺 信濃國鹽田庄常樂寺の別當たり。 柏尾寺に住し、のち守氏が養子となる。

寬海 玄養坊

長俊 釋乘坊 寬海が養子。

長俊 釋乘坊 實は寬覺が二男、寬海が嗣となる。

良圓 建幡坊

圓性 了緣坊

宗俊 宗圓坊

守長 野呂新六 中丸

某 中丸

守泰 野呂介

法一 河内坊

守道 乙丸 葉山を稱す。

盛忠 野呂介

盛迹 野呂介

盛秀 野呂介

景盛 野呂介

盛信 野呂介

景氏 野呂介

國盛 野呂介

盛介 野呂介

盛政 野呂介

盛時 野呂介

盛親 野呂介

種政 野呂介

盛氏 野呂介

守家 野呂介

守春 野呂介

守繁 野呂介

行久 野呂介

定久 野呂介

守綱 丹波守 法名道見

虎吉

源八郎 右衛門尉 今の呈譜、源八郎、宗四郎、甚十郎、右衛門尉、土佐守に作る。母は某氏。はじめ武田信虎につかへ、諱字をあたへらる。のち信玄村上義清と信濃國にをいてしばしば戦ふのとき、殿して兵を收め、あるひは首級の功あり。そののち勝頼北條家と上野國にして合戦のときも軍功を顯はす。天正十年武田家没落のとき蘆田右衛門佐信蕃と共に駿河國田中城を守る。このとき東照宮駿河國に御進發あるに及びて武田家に屬する諸城みな落るといへども、田中城のみまだおちず。ときに成瀬吉右衛門正一甲斐國より飛脚を馳て勝頼死するの聞えあるよしをつぐ。寄手矢文を城中に射て降を促すといへども、勝頼が存亡いまだ定かならず。願はくは彼家臣の一筆を得ば城を退べしと答るのとき、穴山梅雪江尻城より使をはせてすみやかに城を渡すべきの旨いひ送りしかば、すなはち城をさり、城邊の長恩寺に寓居し、三月信蕃と共に御麾下に屬し、男昌吉を率ゐて甲斐國市川の御陣營にいたり、東照宮に拜謁し、仰によりてしばらく駿河國藤枝の東雲寺に籠居す。このとき織田右府武田家

の餘類を捜し求めて、これを殺すの聞えあるにより、またひそかに御旨をうけて伊勢國に隠る。六月右府事あるのち本多彌八郎正信大久保新十郎忠隣が許より奉書もて仰を傳ふるにより、男昌吉をしたがへて遠江國相良におもむく。このとき東照宮再び甲斐國にいらせたまふにより、したがひてまつり、北條氏直と若神子にをいて御對陣のとき與力五十二騎、足輕五十人を預けられ、内藤三左衛門信成松平玄蕃允清宗と共に同國巨摩郡大野の砦を守り、霧瀬、初鹿、刈坂等の口々をきりふさぐ。このとき嫡男守友舊領千七百十貫八百文をたまひ、また彼が配下に在し同心五十六騎を預けらる。時に北條家の兵笠間某初鹿口に出張し、その勢ひ近郷に振ふ。虎吉案内者たるにより、兵をひきゐてこれを追うつ。甲斐國靜謐するの後のなを彼地にとまりて諸事を沙汰し、先の與力足輕を昌吉に預けらる。東照宮同國尊徳寺にましますのとき守友が男彦兵衛守吉を携へて御陣所にいたり、成瀬正一を先容として守吉幼稚たりといへども、守友が本領をたまひ、叔父昌吉を陣代たらしめ、人事をこひ申せしかば、其旨にまかせらる。十二年五月十四日 今月の十四日 死す。

年七十三。法名玄玖。甲斐國八代郡木原村の三星院に葬る。これ虎吉が開基せるところなり。妻は武田家の臣山縣三郎兵衛昌景が女、後妻は永井豊後守某が女。

守之

備後守 五郎右衛門 新十郎

守直

新十郎

女子

武田家の臣大木因幡守親吉が妻。

守友

三枝土佐守守義が祖。宗四郎 勘解由 左衛門 善右衛門 はじめ三枝たりといへども、のち山縣を稱し、別に家をおこし、男彦兵衛守吉がとき三枝に復す。

守義

源左衛門 武田家につかへ、天正三年五月二十一日長篠の役に鷹巢にをいて討死す。年三十六。

守秀

源十郎 天正十八年小田原陣のとき、平岩親吉に命じて武藏國岩槻城を攻めたまふのとき叔父昌吉にしたがひ、彼地にをいて討死す。

守廣

平藏

女子

天川平三郎某が妻。寛永系圖に三枝右衛門尉が妻、源藏守英が養母なりと記す。今同書三枝第二の系圖守英が傳を併せ考へてこれを改む。

昌吉

源八郎 平右衛門 土佐守 母は昌景が女。はじめ信玄及び勝頼につかへ、しばしば軍功あり。天正十年三月父とおなじく甲斐國市川の御陣營にをいてはじめて東照宮に拜謁し、のち再び同國に御發向ありて北條家と御對陣のとき父と共に大野の砦を守る。其後かつて父に預けられし與力五十二騎足輕五十人を預けられ、また父がこふ旨にまかせられ、舊領を定彦兵衛守吉にたまひ、幼稚たるにより、昌吉仰をうけて陣代となる。このとき昌吉及び家臣等にも本領安堵の御朱印をたまひ、十一月蘆田信蕃等と共に伴野刑部大夫某が籠れる信濃國前山城を攻、奮戦してつるにこれを陥る。十二月遠江國秋葉寺に於て連署の誓詞を奉る。十一年信濃國小諸城を攻るのとき敵兵相木の砦を出て高野町を焼拂ひ、甲斐國より小諸に至るの通路を遮らんとす。昌吉兵を率してこれを討勵して戦ひしかば、敵敗北す

ること數里、味方機に乗てこれを追討し、つるに其砦を攻とる。このとき家臣等討死し、或は疵をかうぶるもの多し。十二年長久手の役に眞田昌幸の押として信濃國勝間の砦を守り、のち三河國舉母の城番を勤む。十三年昌幸がこもれる信濃國上田城を攻るのとき昌幸先鋒に列し、城外にしてしばしば戦を挑み、國分寺表にをいて味方利を失ひ、敗北し、加賀川まで退くといへども、昌吉川中より馬を返し、進みたくかひて敵を迫りしりぞけ、首級を得たり。十八年小田原陣に供奉し、城中の兵を捕へ、敵の密謀を問べきのよし諸軍に令下りしかば、山下彌大夫某をして所所に求めしめ、菅根の山中にをいて一人を擒にしてたまつり、御感の仰を蒙る。五月平岩主計頭親吉と同じく武藏國岩槻城を圍むのとき進んで機多曲輪をのりとり、たゞちに大室曲輪のうちに攻入といへども、味方の兵進むものなし。ひとり昌吉奮ひた、かひ、頭に疵を被り、血流れて眼にそ、ぐに及び、從者に助けられて引退く。このとき姪守秀戦死し、家臣等多く敵兵をうちとり、また命を失ひ、疵を被るもの多し。のち上野國名和にをいて領地一萬石をたまふべきのよし、本多佐渡守

正信内命を傳ふといへども、故ありてかたくこれを辭す。其後武藏國往原郡のうちにして三千七百石餘をたまひ、十九年九戸陣に従ひたまつり、慶長五年上杉勝御征伐のとき供奉し、下野國小山に至り、また台徳院殿信濃國上田城を攻たまふにより、したがひたてまつる。ときに先手の足輕戦を接へ、離離決せざるにより、仰をうけて屋代越中守勝永と共に進み戦ひ、敵兵敗走す。後采地を轉じ、舊地をたまひ、甲斐國巨摩八代兩郡のうちにして六千石を知行し、十九年大坂の役に島田次兵衛重次とおなじく台徳院殿の御旗奉行をつとむ。元和元年の役にも御旗奉行たり。凱旋の後其指揮よろしきむね賞せられ、伏見城にをいて備前守家の御刀を拜賜す。八年駿河大納言忠長卿に附屬せられ、のち台命によりて信濃國小諸城を守衛す。寛永元年六月九日死す。年七十五。法名元譽。甲斐國巨摩郡東向村の信光寺に葬る。妻は酒依清三郎昌光が女。

吉親

三枝監物守幹が祖。監物 甚太郎 武田勝頼につかへ、天正三年五月二十一日長篠の役に鷹巢城にをいて戦死す。年十六。

女子

母は昌光が女、三枝彦兵衛守吉が妻。

守昌

源八郎 勘解由 伊豆守 勘解由 從五位下 母は上におなじ。 天正十三年巨摩郡に生る。文祿二年はじめて東照宮に拜謁す。九郎のち台徳院殿の御小性となり、御膳番をつとむ。慶長五年上杉景勝を征したまふの時したがひたてまつり、下野國宇都宮に至り、上田御陣にも父と共に供奉す。九年八月十八日下總國香取郡のうちに在いて采地五百石をたまひ、十九年大坂の役に扈從し、元和元年の役には弟守秋と共に父が兵を率ゐて戦ひを勵し、首一級を得、弟及び家臣等がうるところ都て九級をたてまつる。凱旋の後加恩ありて甲斐國のうちに在いて四千石を賜ひ、二年從五位下伊豆守に叙任し、八年父と共に駿河大納言忠長卿に附屬せられ、のち遺跡を繼、先の采地を合せてすべて一萬石を領し、父に預けられし足輕五十人を預けらる。其後忠長卿より采地五千石を加へ賜ひ、忠長卿事あるの後内藤豊前守信照に召預けられ、陸奥國棚倉に盤居す。寛永十三年九月十八日召かへされて大猷院殿にまみえたてまつり、十五年二月八日安房國安房、平群、朝夷三郡のうちにして

封地一萬石をたまはり、御鎧炮頭となり、與力十騎同心五十人を預けらる。十六年閏十一月二十九日卒す。年五十五。喜參宗悅松嶽院と號す。四谷の西念寺に葬る。室は諏訪因幡守頼水が女。

女子

母は上におなじ。遠山彦左衛門某が妻。

女子

母は上におなじ。小菅大學某が妻。

守秋

新九郎 母は上におなじ。 台徳院殿につかへたてまつり、大坂兩度の御陣に供奉し、元和元年の役に首一級を得たり。

某

母は上におなじ。海野市助某が妻。

女子

母は上におなじ。

女子

母は上におなじ。

守盛

三枝丹後守守貴が祖。喜之助 平右衛門 母は上におなじ。

守眞

平八 平大夫 母は上におなじ。

守全

初守勝 源八郎 内匠 能登守 隱岐守 從五位下 致仕號全心 母は頼水が女。 元和六年十二月二十七日はじめて台徳院殿に拜謁す。一説に寛永十七年九月十

女子

四日遺領を繼、七千石を知行し、三千石を弟勘兵衛頼増に分ちあたふ。正保三年十月五日仰をうけたまはりて崇源院殿御靈屋普請の事を奉行し、慶安二年十二月八日先に日光山御殿の普請を奉行せしにより、黄金五枚をたまふ。三年十一月十九日御書院の番頭となり、四年八月十六日從五位下登守に叙任し、明暦元年九月十日請旨あるにより、采地をあらためて麻米七千俵をたまふ。萬治二年正月殿有院殿御前髪とらせられし嘉儀として御使をうけたまはりて尾張國名護屋に赴く。寛文三年四月日光山にまうでたまふのとき、したがひたてまつり、延寶四年五月二十一日務を辭し、寄合に列し、十二月六日致仕す。八年五月二十六日死す。年七十一。法名全心。麻布の天真寺に葬る。妻は小出大隅守三尹が女。

頼増

三枝百助守榮が祖。源十郎 主殿 勘兵衛 諏訪を稱し、子孫源十郎 頼音にいたり、三枝にあらたま。

守定

長七郎

守行

彌八郎

守秀

大藏

女子

初勝之 權九郎 右衛門 實は松平薩摩守家臣桂織部久祐が男、母は同家の臣島津中務某が女、守英が養子となりて其女を妻とす。 享保三年三月二十二日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、四年十一月十一日父にさきだちて死す。年十九。 妻は守英が養女。

守尹

初勝之 權九郎 右衛門 實は松平薩摩守家臣桂織部久祐が男、母は同家の臣島津中務某が女、守英が養子となりて其女を妻とす。 享保三年三月二十二日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、四年十一月十一日父にさきだちて死す。年十九。 妻は守英が養女。

女子

實は平松中納言時方が女、守英に養はれて守尹が妻となる。

女子

守輝

初守眞 源八郎 内近 右近 能登守 從五位下 母は三尹が女。 承應三年五月二十三日はじめて殿有院殿にまみえたてまつる。時に延寶四年十二月六日家を繼、六千五百俵を賜ひ、五百俵を弟平兵衛守仍に分ち與ふ。八年正月十一日定火消となり、八月二十一日布衣を着する事をゆるさる。貞享元年三月二十七日御小性組の番頭となり、十二月二十五日從五位下能登守に叙任し、二年九月二十三日稻葉丹後守正住所司代の職をゆるさる。により、京師におもむき仰を傳ふ。三年十一月十一日御書院の番頭に轉じ、元祿五年二月二十三日大番の頭にす。み、八年八月九日隊下の土河村甚右衛門某死刑に處せらる。により、拜謁をはかり、九月十九日ゆるさる。十年七月二十六日麻米をあらためられ、陸奥國岩瀬伊豆國加茂兩郡のうちに在いて六千五百石を知行す。寛永元年十月十八日死す。年五十八。法名宗魁。葬地守全におなじ。妻は九鬼式部少輔隆季が女、後妻は平松中納言時量が女。 守里 小出右京亮守傳が祖。初有利 守

守仍

秀吉 彌三郎 左京 若狭守 下野守 淡路守 小出を稱す。 三枝源右衛門守興が祖。又助 平兵衛 一柳權之丞直實が妻。

女子

早世 源八郎

女子

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

某

早世 源八郎

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

女子

早世 源八郎

女子

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

守英

初守興 千之助 右近 丹波守 從五位下 母は時量が女。 貞享四年九月六日はじめて常徳院殿にまみえたてまつる。時に寶永二年三月十九日遺跡を繼、三月二十八日父が遺物來國光の刀を獻す。六年四月十三日定火消となり、十九日布衣を着する事をゆるさる。正徳四年七月十一日御小性組の番頭にす。み、十月二十六日從五位下丹波守に叙任し、享保三年八月十八日其務にかなはざるにより、小普請に貶され、出仕をはかり、十二月十六日ゆるさる。四年六月二十六日寄合に列し、九年六月二十四日死す。年四十七。法名英山。白銀の瑞聖寺に葬る。妻は永井伊豫守直右が女。

二年五月十二日務を辭し、明和七年十二月六日致仕し、天明二年二月四日死す。年六十五。法名行茂。葬地守英におなじ。妻は小出伊織尹従が女。
 女子 秋山安房守正苗が妻。

女子 小出伊織有頼に嫁し、離婚のち、大島雲平義周が妻となる。
 某 早世 豊之丞

守恭 源之助 母は尹従が女。

寶曆十三年九月朔日はじめて凌明院殿に拜謁し、六日孝恭院殿はじめて山王社にまうでたまふの時、騎馬にて扈從し、明和七年十二月六日家を繼、天明七年正月二十三日死す。年四十一。法名道秀。葬地守全におなじ。妻は平松中納言時行が女、後妻は伊東若狭守長丘が四女、死してのち其六女を娶る。
 兼寧 初守苗 鍋之助 野々山松之丞兼好が養子。
 某 千之助

守胤 繁三郎 左京
 女子 井上周防守正乗が妻。
 女子 土屋山城守業直が妻となり、のち離婚す。

某 源八郎

女子 早世 源八郎

守政 金次郎 右近 母は長丘が六女。
 天明七年四月三日遺跡を繼。九に寛政七年十二月二十二日はじめて將軍家に拜謁し、十年八月二十一日駿府城の守衛に在て死す。年二十。法名靜應。葬地守英におなじ。

女子 西郷齋官員豊が妻。

守典 龜之助 實は三枝源十郎頼音が二男、母は某氏、守政が終に隨て養子となる。
 寛政十年十一月四日遺跡を繼。九に二引兩家紋 丸に三枝松 丸に二引兩

小出 もと三枝たりといへども、守里外家の號を冒して小出と稱す。

守里 初有利 守秀 萬吉 彌三郎 左京 若狭守 下野守 淡路守 從五位下 三枝隱岐守守全が二男、母は小出大

隅守三尹が女。
 明曆二年八月二十六日はじめて嚴有院殿にまみえたてまつる。八に寛文七年十一月二十一日御小性組の番士となり、九年十二月二十一日麻米三百俵をたまふ。十年七月十一日中興に候すべきむね仰を蒙り、二十二日中興の番士に列し、十二月二十八日百俵を加へらる。十二年三月九日御小性に轉じ、十二月二十八日また二百俵を加賜せられ、この日從五位下若狭守に叙任す。のち嚴有院殿親筆風月の二字及び鶴の御書を拜賜す。延寶八年薨御により、寄合に列し、天和元年十一月二十九日御徒の頭となり、二年四月二十一日五百石を加恩あり。三年十一月十日御書院の組頭に轉す。元祿三年正月十一日京都の町奉行にす、み、七年十二月二十三日五百石を加増せられ、九年二月二日より伏見奉行を兼、五月二十七日職を辭し、寄合に列す。十年七月二十六日麻米を改められ、采地六百石をたまひ、上野國邑樂、下野國河内、武藏國葛飾、下總國千葉、葛飾、伊豆國加茂、六郡の内をいてすべて千六百石を知行す。十一年十二月朔日御作事奉行となり、十二年四月二十一日死す。年五十一。法名宗預。麻布の天眞寺に葬る。妻は西尾丹後守忠照が養女。

守明 傳四郎 彌三郎 實は日向半兵衛正次が三男、母は駿河大納言忠長卿の家老島居士守成次が女、守里が養子となりて其女を妻とす。
 元祿六年九月朔日はじめて常憲院殿にまみえたてまつり、十二年七月九日遺跡を繼、小普請となり、享保六年六月二十五日致仕す。元文五年二月二十日死す。年六十六。法名道雄。四谷の發昌寺に葬る。妻は守里が女。

女子 守明が妻。
 女子 久保勘次郎政周が妻。

安守 萬吉 隼人 靱負 母は某氏。
 享保六年六月二十五日家を繼、八月九日はじめて有徳院殿にまみえたてまつり、九年十月九日御書院番に列し、十一月十五日惇信院殿に附屬せられて二九に候し、十年六月朔日より西城に勤仕し、寛保二年十二月十六日番を辭す。延享元年十一月二十日致仕し、寶曆八年正月十三日死す。年六十五。法名大道。葬地守明におなじ。妻は久保勘次郎政周が女。

某 岡三郎

守興 民部 實は田中主膳元陳が二男、母は某氏、守安が養子となり、其女を妻とす。
 延享元年十一月二十日家を繼、十二月十一日はじめて有徳院殿に拜謁し、三年六月二十七日御書院番となり、寶曆二年正月二十八日死す。年三十六。法名紹通。麻布の天眞寺に葬る。後代々葬地とす。妻は守安が女。

女子 守興が妻。

守廣 兵部 彌三郎 母は守安が女。
 寶曆三年四月三日遺跡を繼、明和二年十一月二十九日西城の御書院番となる。安永八年十二月六日死す。年四十四。法名紹觀。妻は小笠原筑後守持賢が女。

女子 春出善太郎直次が妻。

守身 八十之助 母は持賢が女。
 安永八年十二月二十六日遺跡を繼、天明三年十月二十七日死す。年二十一。法名宗澄。

守傳 右京亮 兄守身が養子。
 女子

守傳 小膳 又五郎 右京亮 從五位下 實は守廣が二男、母は持賢が女、守身が嗣となる。
 天明三年十二月二十七日遺跡を繼。地千七百石。六年九月二日御書院の番士となり、のち的を射て時服をたまふ。七年十月二十一日御小納戸にす、み、十二月十八日布衣を着する事をゆるさる。寛政六年七月十六日御小性にうつり、八月二十九日將軍家親筆朝日に梅の御書をたまふ。のち放鷹に扈從し、鳥を射て物をたまふ。七年十二月十七日從五位下右京亮に叙任し、十年五月九日小十人の頭となる。妻は小笠原縫殿助持易が女。

守正 又五郎 母は持易が女。
 某 達安 小膳 錦次郎
 家紋 丸に二八の文字 丸に櫻花

三枝 又助 平兵衛 三枝隱岐守守全が三男、母は小出大隅守三尹が女。

守仍 又助 平兵衛 三枝隱岐守守全が三男、母は小出大隅守三尹が女。

寛文六年八月二十一日はじめて殿右院殿に拜謁す。時延寶四年十二月六日父が遺跡のすち五百俵を分ちたまひ、小普請となる。五年五月十日御小性組に列し、貞享元年正月二十六日より進物の事を役す。三年六月十一日桐間の番士に轉じ、八月二十七日死す。年三十一。法名宗完。麻布の天眞寺に葬る。のち代々葬地とす。妻は大岡備前守清重が女。

守一

數馬 平兵衛 致仕號松翁 實は三枝平右衛門守房が三男、母は某氏、守仍が養子となる。

貞享三年十二月十日遺跡を繼。時四四年八月七日はじめて常憲院殿に拜謁し、元祿十年七月二十六日原米をあらためられ、上野國邑樂甘樂兩郡のうちにして采地五百石を知行す。十五年五月十日御書院番に列し、のち番が辭し、享保三年三月十六日御書院番に復す。寶曆三年四月二十五日老を告て番を辭す。このとき黄金二枚をたまふ。六年九月二十日致仕し、九年十二月二十六日死す。年七十七。法名松翁。

女子

守一に婚を約すといへども、いまだ配せずして死す。
女子 神尾助左衛門茂次が妻。

久雄 清五郎 七郎兵衛 織部 今井七九郎好澄が養子。

守正

平四郎 源右衛門 母は某氏。享保九年九月朔日はじめて有徳院殿にまゐたてまつる。時延寶六年九月二十日家を繼、十二月二十日御書院番に列す。安永元年十月二十四日死す。年六十四。法名宗快。妻は岡田新八郎利休が女。

庸清

主水 大岡三次郎清詳が養子。

清武

九十郎 兄庸清が養子。

女子

三枝伊勢守守隆が養女。

守富

數馬 平兵衛 母は利休が女。安永元年十二月二十七日遺跡を繼、二年三月二十五日はじめて澄明院殿に拜謁し、六月七日御書院の番士となる。四年四月二十五日番を辭し、天明六年九月二十八日死す。年四十四。法名道家。

守信

内記 兄守富が養子。

勝茂

政五郎 左京 平岡瀬兵衛茂曹が養子。

守之

頼母

卷第千四百四十九

三枝部氏

三枝

頼増が時より外家の號諏訪を稱し、頼音に至り三枝に復す。

頼増

源十郎 主殿 助兵衛 三枝助解由守昌が二男、母は諏訪因幡守頼水が女。
元和六年はじめて台徳院殿にまゐたてまつる。時延寶十七年三月十九日御小性組の番士となり、九月十四日父が遺領のうち安房國安房平群朝夷三郡のうちをいて三千石を分ちたまふ。正保三年十一月晦日仰をうけたまはりて下野國今市御殿の普請を奉行し、慶安二年九月二十二日組頭にすゝみ、四年八月十六日布衣を着する事を聽さる。寛文七年二月十四日御先銃炮の頭となり、延寶二年二月朔日死す。年六十二。法名全寶。赤坂の松泉寺に葬る。のち代々葬地とす。

頼隆

百助 左兵衛 助兵衛 母は某氏。明曆二年八月十日はじめて殿右院殿に

守信 民之助 内記 實は守正が二男、母は利休が女、守富が嗣となる。天明六年十一月七日遺跡を繼、十二月二十二日はじめて將軍家にまゐたてまつる。寛政元年十二月二十三日死す。年四十四。法名宗無。

守興

金彌 単人 源右衛門 實は堀田内膳止清が六男、母は高橋氏、守信が養子となりて其女を妻とす。寛政二年三月四日遺跡を繼。時三十一歳。四月十五日はじめて將軍家に拜謁し、五年九月十八日御書院番となる。妻は守信が女。

女子

守興が妻。

守由

彌之助 母は高田氏。家紋 丸に三枝松 丸に二引兩

一日西城小十人の頭となり、十二月十六日布衣を着する事をゆるさる。寶曆二年四月朔日西城御先銃炮の頭に轉じ、五年三月四日務を辭し、寄合となり、十二年八月八日死す。年六十四。法名全直。妻は小濱主水良隆が女。
頼展 三枝其四郎頼一が祖、式部 後甚四郎頼郷が時三枝に改む。
景明 右門 傳十郎 傳五郎 山岡新五郎景任が養子。

某

源十郎 寛延元年十一月二十八日はじめて惇信院殿に拜謁す。

頼音

初行種 鍋熊 百助 源十郎 實は佐野修理亮仲行が三男、母は某氏、頼直が養子となりて其女を妻とす。
寶曆十二年十一月八日遺跡を繼、十二月七日はじめて澄明院殿に拜謁し、三年五月十七日こぶて三枝に改む。明和三年正月二十一日御書院番に列し、安永二年七月二十五日番を辭し、天明五年五月二日西城御書院の番士となり、寛政元年十二月九日死す。年五十一。法名全龍。妻は頼直が女、後妻は堀田若狭守正實が女。

女子 頼音が妻。
女子 間宮兼八郎信幸が養女。

女子 加藤彌次郎明能が妻。
女子 佐野肥前守義行が養女。

守榮

百助 母は某氏。
寛政元年十二月二十六日遺跡を繼。
其時五十五石。二年四月十五日はじめて將軍
家に拜謁し、十年五月晦日御書院番と
なる。妻は能勢筑前守頼直が女。

女子

守典

女子

家紋 丸に三枝松 丸に二引兩
頼直より頼直に至るまで諏訪の紋丸に三
梶の葉を用ふ。

三枝

はじめ諏訪を稱し、頼直が時より三枝に
あらたむ。

頼辰

式部 諏訪甚四郎頼寛が二男、母は

植村大膳政行が女。

享保五年十月朔日父が遺跡のうち、安房
國安房平兩郡のうちを以て采地五百石
を分ち賜ひ、小普請となる。其時十一月
九日はじめて有徳院殿に拜謁し、十一月
正月二十八日西城の新番となり、二十年
六月七日死す。年二十九。法名全通。赤
坂の松泉寺に葬る。後代々葬地とす。
妻は津田三左衛門正氏が女、後妻は佐野
豊前守察行が女。

頼都

源五郎 甚四郎 母は察行が女。
享保二十年九月七日遺跡を繼。其時寶
曆六年八月二十四日死す。年二十三。
法名全澤。

頼郷

龜三郎 式部 甚四郎 實は松平
左大夫定卓が三男、母は某氏、頼
郷が終に隨て養子となる。
寶曆六年十一月四日遺跡を繼、十二月
十九日はじめて惺信院殿にまみえて
まつる。十一年十一月十三日大番に列
し、十三年五月二十四日こふて三枝に
あらたむ。安永七年十一月五日死す。
年四十一。法名全哲。妻は永田主計
直乾が女。

頼一

源吉 甚四郎 實は山中孫三郎時

幾が二男、母は九勢氏、頼郷が養
子となりて其女を妻とす。

安永六年七月十一日はじめて澄明院殿
にまみえてまつり、七年十二月二十
七日遺跡を繼。其時三十一石のち騎射をつ
とめて黄金を賜ふ。天明六年三月采地
を上總國武射生兩郡のうちにつつま
る。八年六月十三日大番に列し、のち
的を射て時服をかつげられ、寛政九年
二月二十六日組頭にすむ。妻は頼
郷が女。

女子

女子

女子

某

女子

女子

某

女子

家紋

丸に三枝松 丸に二引兩

三枝

守盛

喜之助 平右衛門 三枝土佐守昌吉
が四男、母は酒依清三郎昌光が女。
慶長十八年はじめて台徳院殿にまみえた
てまつる。其時十石のち駿河大納言忠長卿に
つかへ、忠長卿事あるのち寛永十三年
九月十八日めされて大猷院殿に拜謁し、
常陸國筑波新治兩郡のうちにて采地五
百石をたまふ。十五年十二月二十三日御
小性組の番士に列し、萬治元年北條出羽
守氏重、封地を除かるゝのとき、十二月
二十五日小出甚太郎重堅と共に御目付に
代りて遠江國掛川におもむく。二年十二
月十二日御先銃炮の頭にすむ。二十三
日三百俵を加へられ、二十八日布衣を着
する事をゆるさる。延寶二年正月十一日
御鎗奉行に轉じ、三年十二月十三日死す。
年七十一。法名全英。青山の青原寺に葬
る。のち代々葬地とす。妻は長谷川藤
右衛門長重が女、後妻は伊東九郎左衛門
祐久が女。

守房

喜之助 平三郎 平右衛門 母は
祐久が女。
明曆三年七月十六日はじめて嚴有院殿
に拜謁す。其時十石。又三年十一月九日御

小性組に列し、延寶四年七月十二日遺
跡を繼、元祿三年七月十三日桐間の番
士となり、二十八日故ありて小普請に
貶され、出仕をとめられ、四年四月
二十四日ゆるされて御小性組に復す。
八年五月十二日死す。年四十九。法名
全澤。妻は岡部次郎兵衛重綱が女。

守遠

權十郎 權左衛門 母は祐久が
女。
寛文三年三月二十三日はじめて嚴有
院殿に拜謁す。其時十一石。十一月十九日御
書院番となり、慶長三百俵をたまひ、
のち番を辭し小普請となる。享保九
年閏四月十二日死す。年七十七。法
名日種。牛込の久成寺に葬る。妻
は岡田太郎右衛門利直が女。

某

長十郎 母は利直が女。
元祿九年九月朔日はじめて常憲院殿
にまみえてまつる。其時十石。享保九年
七月二日遺跡を繼、十月九日御書院
番となる。十三年九月四日常に家事
よろしからず、しかのみならず妹兩
人まで不義ありて逐電し、尋ね出す
べき旨仰出さるゝのところ、江府の
うちに在しを三年に及びても尋ね出
さず、かれこれ不束の至なりとて改
易せらる。

利林

女子

女子

女子

守次

喜之助

平三郎 平右衛門 母は
重綱が女。
天和三年七月十一日はじめて常憲院殿
に拜謁し、元祿六年十二月九日御書院
番となり、八年七月十一日遺跡を繼、
五百石を知行し、三百俵を弟左門守隆
に分ちあたふ。享保二十年閏三月十三
日老を告て番を辭す。このとき黄金二
枚をたまふ。延享元年七月三日死す。
年八十。法名榮枝。妻は有馬中務大
輔家臣植平之丞某が女。

守隆

守一

守令

喜之助 平三郎 平右衛門 母は
平之丞某が女。
享保元年九月朔日はじめて有徳院殿に

まみえたてまつる。時十九年七月二十
六日御小性組の番士となり、十二月十
六日より進物の事を役す。十一年三月
二十七日小金原に狩したまふのときし
たがひたてまつり、鹿二頭を得たり。
のち的を射て時服をたまふ。延享元年
十月二日遺跡を繼、寶曆三年七月二十
一日小十人の頭に進み、十二月十八日
布衣を着する事を聽さる。七年六月十
日務を辭し、寄合に列し、九月十四日
死す。年五十五。法名全珠。妻は跡
部八郎兵衛正因が女。

守貞

勝之丞 新十郎 三枝主膳守秀が
養子。
齋宮 傳藏 三枝伊勢守守隆が養
子。

守雄

喜之助 平三郎 致仕號齋齋 後
幼翁 母は正因が女。
寛延三年十二月二十日、西城の御書院
番となり、のちしばく的を射て時服
をたまふ。寶曆七年十二月三日遺跡を
繼、安永四年八月二十二日番を辭し、
閏十二月十二日致仕す。寛政十年十月
二日死す。年七十七。法名退道。妻
は天野近江守正景が女。
女子 松平三郎左衛門康淳が妻。

に列す。寶曆元年四月三日致仕し、十一
年十月八日死す。年八十二。法名日住。
下谷の善立寺に葬る。のち代々葬地とす。
妻は小出善左衛門貞則が女。

守經

齋宮 傳藏 致仕號古翁 實は三
枝平右衛門守次が二男、母は有馬
中務大輔家臣柘植平之丞某が女、
守隆が養子となりて其女を妻と
す。

女子

享保十九年三月十九日はじめて有徳院
殿に拜謁し、寶曆元年四月三日家を繼。
四年五月二十九日御書院番となり、の
ち的を射て時服をたまふ。安永九年五
月二十一日老を告て番を辭す。このと
き黄金二枚をたまひ、十二月十九日致
仕す。天明二年九月八日死す。年七十
二。法名日在。妻は守隆が養女、後
妻は今井帶刀好昌が女。
實は三枝平兵衛守一が女、守隆に
養はれて守經が妻となる。

守稱

斧三郎 縫殿助 伊兵衛 致仕號
常久 母は守隆が養女。
安永九年十二月十九日家を繼、天明二
年正月二十一日御小性組に列し、七年
十二月二十一日番を辭す。八年七月二

守保

平八郎 主膳 三枝新十郎守貞が
養子。
女子 六郷源左衛門政廣が妻。

守貴

孝三郎 平右衛門 丹後守 從五
位下 實は三枝土佐守守應が三男、
母は某氏、守雄が養子となりて其
女を妻とす。
安永四年閏十二月十二日家を繼。時
五年正月二十六日御小性組に列
し、のち的を射て物をたまふ。八年十
一月四日より進物の事を役す。天明元
年四月二十一日御小納戸にす、み、十
二月二十八日布衣を着する事をゆるさ
る。のち放鷹にしたがひたてまつり、
鳥を射て時服をたまふ。八年九月二十
六日將軍家親筆の御書を拜賜す。寛
政二年十一月十一日御小性に轉じ、四
年十二月十六日從五位下丹後守に叙任
す。五年九月十五日若君に附屬せられ、
のち西城に候す。妻は守雄が養女。

女子

實は松平三郎左衛門康淳が女、守
雄に養はれて守貴に配す。
喜之助 兄守貴が養子。

守眞

喜之助 實は守雄が二男、母は正景
が女、守貴が養子となる。

守眞

十六日致仕し、寛政七年八月二日死す。
年五十七。法名日信。妻は永田三郎
右衛門尚昌が女、後妻は加藤王殿貞則
が女。

守長

初五郎 傳藏 實は高井庄左衛門
清益が五男、母は某氏、守稱が養
子となりて其女を妻とす。
天明八年七月廿六日家を繼。時
寛政二年三月十一日御小性組の番士と
なり、八年十二月十日若君に附屬せら
れて西城に勤仕す。妻は守稱が女。

女子

守長が妻。

某

時之助

守教

斧三郎 母は守稱が女。

守量

長次郎

守政

兵橘

家紋

丸に三枝松 丸に二引兩

天明五年十二月九日はじめて淺明院殿に
拜謁す。時三 妻は金森左兵衛可始が女。

女子

嶺之丞

某 當五郎

某 當五郎

三枝

守隆

左門 傳藏 伊勢守 從五位下 三
枝平右衛門守房が二男 母は某氏。
元祿八年七月十一日父が遺跡のうち三百
俵を分ちたまひ、小普請となる。時十
一年八月九日桐間番となり、十月二日御
小性に轉す。十二年三月二十三日御書院
番にうつり、享保七年二月十一日年ごろ
怠なく勤めしを賞せられて黄金二枚をた
まふ。九年十一月十五日信院殿に附屬
せられ、二丸に候し、のち西城に勤仕す。
十八年十月二十八日御徒の頭に轉じ、十
二月十八日布衣を着する事をゆるさる。
寛保元年正月十一日禁裏附に進み、四月
二十三日從五位下伊勢守に叙任す。延享
三年三月十二日務を辭し、四月四日寄合

寛政重脩諸家譜 第六輯終

大正十二年三月十五日印
大正十二年三月十八日發

刷行

寛政重脩諸家譜第六輯

〔非賣品〕

發行者 中塚榮次郎

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

印刷者 長谷川美麿

東京市京橋區弓町十二番地

印刷所 千代田印刷株式會社

東京市京橋區弓町十二番地

不許
複製

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座 七八三番
振替東京 五二二九八番

63
238

終